

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：23304

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K12551

研究課題名（和文）「自然」が文化資源化されるマスツーリズムの状況の観光人類学的研究

研究課題名（英文）Studies of anthropology of tourism about mass-tourism situation in which the "nature" is established as cultural resources.

研究代表者

杓谷 茂樹 (Shakuya, Shigeki)

公立小松大学・国際文化交流学部・教授

研究者番号：90410654

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、北米最大の観光地として急激な観光開発が進み、高度なマスツーリズムの状況下にあるメキシコのユカタン半島北部地域で行われている「エコツーリズム」、先住民村落観光および遺跡観光において、自然が展示に含まれるケースを追った。そこで展示された「自然」は、意図的に客体化され、操作されて文化資源のラインナップのひとつとして提示されており、これによって同地域のマスツーリズムにバラエティを与えていた。期間中に関連調査をおこなった中米ベリーズおよび沖縄本島の状況との比較をふまえ、地域社会の自律性の高さとマスツーリズムとしての経済規模の大きさに応じて「自然」の文化資源化のあり様が決定することを理解した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、地域の自然ですら文化資源化して、内部に取り込んでしまうマスツーリズムの特質を追求し、理解することを目指してきた。マスツーリズムの特質に文化の側面から批判的に取り組んだ本研究は、観光研究に新しい方向性を示すことができたと考える。

現在メキシコのユカタン半島地域4州では、政府主導でマヤ鉄道計画が進められており、当地は本研究開始時点では想定できなかったような開発状況下におかれている。自然環境破壊、先住民社会への悪影響など様々な批判を受けつつ進展するこの計画に対しても有効な見方を本研究は提供できるものと考えられ、さらに進む当地のマスツーリズムの状況への批判的まなざしを提示できるものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the mass-tourism situation in which the "nature" is established as cultural resources, in the northern region of the Yucatan Peninsula, Mexico. In the investigations on tourism in indigenous pueblos and archaeological sites and so called Eco-tourism, there in Yucatan, we understood that the "nature" exhibited in those touristic areas was objectified intentionally and arranged so as to be lined up as one of the cultural resources in the menu book of the regional touristic attractions. And through comparison with the results of investigation in Belize CA and Okinawa main island held in the research period, we could understand that the establishment of "nature" as cultural resources was highly related with the degree of autonomy of the regional society and the economic scale of the region as mass-tourism area.

研究分野：文化人類学、観光人類学

キーワード：観光 文化資源化 “自然” マスツーリズムの状況 マヤ

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

報告者はこれまでメキシコのカンクン・リヴィエラマヤ観光圏の遺跡公園を中心にマヤ文明イメージの生産と消費、あるいはマヤイメージを巡る様々な立場の人間の主導権争いについて研究を続けてきた。

一般的にマスツーリズム的状况においては、あらゆる観光対象が外部の観光者側のまなざしにより資源化されることは、これまでもしばしばいわれてきたことである。実際、この地域ではそれぞれの観光資源に関する情報やイメージは、様々なメディアを通して世界中に伝えられており、ここを訪れる多くの観光者は、あらかじめ与えられた情報やイメージを持ち、期待してやって来る。マスツーリズム状况下では、しばしばそうした観光者の期待に応え、彼らを満足させるために、あらかじめ観光者側のまなざしに沿うようにイメージの操作が行われる形でその受入れの準備がなされているのである。そうした観光資源のイメージの操作が、例えば古代マヤ文明の遺跡などで行われることは容易に想像がつく。しかし、本来保護され、維持されていかなければならない自然が、観光者を喜ばせるためのアトラクションのひとつとして操作され、手軽な見世物となってしまうということも起こっているのである。

そして近年、マヤというこの地域の文化イメージに結びつけられる形で、「自然」が不自然に語られるケースが出てきたことを、報告者は以前より注目してきた。文化遺産観光の視点から考えたときに、我々はその状況をどう受け止めたらいいのだろうか。その問いへの答えを出すことは、マスツーリズムの特質を明らかにし、一般的な議論の遡上にのせ得る考えを導き出すために必要なプロセスとなるように考えた。

### 2. 研究の目的

本研究は、マスツーリズム的状况下で文化遺産との関係の中でイメージが操作される「自然」に注目したところを特色としており、そこで起こる「自然」の文化資源化のプロセスにマスツーリズムの特質を見て取ることを目的とした。カンクン・リヴィエラマヤ観光圏という観光の現場で起こっている「自然」の文化資源化と報告者が呼ぶ現象の分析をおこなうことで、マスツーリズムの特質を考察し、持続可能で適切な観光振興の議論と実践に、マスツーリズム研究の側の視点をいれてアプローチしていこうとするものである。

### 3. 研究の方法

本研究では、マスツーリズム状况が高度に進んだカンクン・リヴィエラマヤ観光圏における観光資源の活用のあり方の批判的な検討を、文献やインターネットの記事などの検索、読み込みとともに、「自然」の文化資源化に注目したメキシコでの現地調査を通して実施した。現地調査のうち、遺跡公園においては、周囲の環境をいかに活かしながら建造物の展示が行われているかの観察と、公園管理者などへのインタビューを行い、先住民村落にはツアーに参加する形で赴き、住民との会話の中で情報の獲得に努めた。一方、カンクン・リヴィエラマヤ観光圏で起こっていることが、この地に特有な高度なマスツーリズム的状况だからこそ起こったことであることを確認するために、ユカタン半島の一部を占めていてほぼ同じ自然環境がある中にマヤ遺跡が点在するものの、現状では未だマスツーリズム化していない隣国ベリーズの西部地域と、日本有数の海浜リゾート地でありながら、世界遺産となっているグスク遺跡が点在して観光資源のバラエティとなっている沖縄本島でも調査をおこない、比較材料とした。またこれらと並行して、博

博物館展示で物質文化と自然が関連づけられている事例を見るために、メキシコ、日本および米国の博物館の観覧を行ったほか、マスツーリズムの特質を議論して行くために、文献から理論的な裏付けを得る努力もおこなった。

#### 4. 研究成果

本研究初年度の2019年度には、メキシコとアメリカ合衆国において、遺跡公園や博物館における古代文明の展示のあり方にどういった自然観が関与させられているかについての、観察、調査を実施した。メキシコでは、まずはキンタナ・ロー州のカリブ海沿岸地域において、高度に観光化されたトゥルム、エル・レイ、サン・ミゲリートなど有料公開されている遺跡公園の観察と公園管理者へのインタビューを行っただけでなく、ホテルの敷地内で宿泊客に見せるためだけに囲い込まれ保存、展示されている小型遺跡(ヤミル・ルウム、ピジャス・タアクル、プンタ・カンクンなど)の確認を行うことができた。特にホテル敷地内に囲い込まれた小型遺跡からは、ホテル側が宿泊者に提供したいメキシカン・カリブの「自然の語り」と、古代の建造物にまつわる「語り」があまりかみ合っていないまま展示が行われている様子は興味深く感じた。また、これに関連して Parque Eco-arqueológico の考えが始まったとされるチアパス州のパレンケ遺跡公園や、メキシコシティの国立人類学歴史学博物館や同市近郊のテオティワカン遺跡公園なども訪問し、観察することができた。アメリカ合衆国ではニューヨークのメトロポリタン美術館を訪れ、メソアメリカのみならずその他の文明についても、文明に関する情報提示で、現代社会における自然観がそれぞれどのように提示の中に投影されているかに注目して観覧した。

次の2020年度と2021年度の2年間は、コロナウイルス感染拡大により渡航が叶わず、現地調査は中断を余儀なくされたが、現地インフォーマントからオンラインでフィールドの現状についての情報を獲得しながら、主に本務校の研究室においてインターネット上の情報の他、ガイドブックなどの記述からマスツーリズムの状況あるいはマスツーリズム的思考におけるヘリテージの語りに、「自然」の語りがどのように関与しているのかの考察に努めた。

2022年度になって、メキシコにおいて、遺跡公園や博物館における古代文明の展示のあり方にどういった自然観が関与させられているかについての、観察、調査が実施できた。調査地は多数の観光客が訪れる観光地であり、令和2年の夏期以降しばらくは、それまでと比較して観光客の入れ込みのみならず、受け入れ側の動きも停滞気味であったため、継続的な調査というよりは、新たに観察をはじめるかたちになることがしばしばあった。キンタナ・ロー州のカリブ海沿岸地域において、高度に観光化されたトゥルム、エル・レイ、サン・ミゲリート、エル・メコなど有料公開されている遺跡公園の観察のみならず、ホテルや別荘地、ゴルフ場などの敷地内にオブジェとして保存、展示されている無名の建造物などについても、できるだけ再確認するように努め、観光資源化に伴う自然の改変の性格が強い場所ほど、建造物を自然と脈絡を切り離して展示している様子が観察できた。

ただ、現地調査ができないでいたこの2年ほどの間に、国家プロジェクトとして開始されていたマヤ鉄道計画(Proyecto Tren Maya)による開発が、当初の予想を超えて、非常に急ピッチに進められ、ユカタン半島の沿線地域では自然や文化遺産に大きな影響が出るようになった。当地の自然や文化遺産の保全(あるいは破壊)には政府が巨額を投じて作業を進めており、その中では例えば、駅が置かれるチチェン・イツァ遺跡公園に博物館が新たに建設されることになるなど、本計画の当初の目標を考え直さざるを得ないようなテーマが新たに生まれる可能性が出てきて、どのようにこの研究をまとめていくかを再考する必要がうまれた。その意味では、研究期間を2年延長できたことで、本研究終了後の次の研究の方向性を見定めることができたことは非常に

よかったと考える。

このように、コロナウイルス感染拡大による現地調査中断期間を経て、研究開始当初の想定とは調査地の状況が大きく変わってきたことから、本研究の議論にとりあえずの区切りをつけるために、最終年度にはこれまでのメキシコでの調査地に対する比較対象を設定することとした。まずは比較的開発の進みが遅い隣国ベリーズに赴き、同国西部地域のマヤ遺跡公園の状況を観察した。同国はこの30年ほどエコツーリズムに力を入れるなど、文化と自然とのバランスがとれており、近年遺跡公園の整備も進んできている中、かつてそこで暮らしていた人たちの自然観が、その文化展示にもよく反映されていると感じた。ここでは、メキシコ、ユカタン半島北部では大規模開発の中で見失いそうな、示唆的な知見を得ることができたと考えた。また、限られた時間ではあったが、沖縄本島のグスク遺跡と同地の自然観の関わりについても観察することができた。沖縄はこれまでも、ユカタン半島との様々な類似性から、何度か調査をおこなってきた場所である。沖縄ではその独特の自然観の上に、文化があり、グスクが形作られており、博物館など関連する文化展示施設でも、それが比較的適切に表現されている様子がよく理解できた。

こうしたベリーズや沖縄の事例と比較することで、メキシコ、ユカタン半島北部では、経済的な動機が最優先されて開発が進むなかで、文化や自然へのリスペクトを欠いた現実が、同地のマヤ文化展示の背景に厳然として存在することが際だって見えてきた。そして、地域社会の自律性の高さやマスツーリズムとしての経済規模の大きさが係数となり、「自然」の文化資源化のあり様が決定されることが理解できた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 杓谷茂樹
2. 発表標題 遺跡公園と道 - チチェン・イツァへのアクセスの変遷と公園内外で起こる変化について
3. 学会等名 古代アメリカ学会 第28回研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Shigeki Shakuya
2. 発表標題 La influencia del Proyecto Tren Maya a la Zona Arqueologica de Chichen Itza y a la sociedad alrededor: el nuevo inicio de la lucha por la patrimonializacion de la cultura maya de Chichen Itza
3. 学会等名 Coloquio: "Estudio diacronico de la patrimonializacion de los recursos historico-socioculturales y las interacciones de sus actores en Mexico" (国際学会)
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 国本伊代 { 編者 }, 伊藤みちる, 木下雅夫, 佐藤瞬, 杓谷茂樹, 杉山立志, ソリス麻子, 富田晃, 中平真由巳, 吉田和隆 (共著者)	4. 発行年 2024年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 -
3. 書名 ベリーズを知るための60章 (校正中)	

1. 著者名 Rodrigo Liendo Stuardo y Kazuo Aoyama (編著者), Yukitaka Inoue Okubo (井上幸孝), Shigeru Kabata (嘉幡茂), Takanori Kobayashi (小林貴徳), Shigeki Shakuya (杓谷茂樹) ほか (共著者)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Instituto de Investigacion Antropologicas, Universidad Nacional Autonoma de Mexico, Ciudad de Mexico	5. 総ページ数 233
3. 書名 Mesoamerica: el estudio de sus procesos de transformacion social desde una perspectiva de larga duracion. ( "La imagen turistica de Chichen Itza como patrimonio mundial: de la situacion pendiente de la invasion de los vendedores locales y el control adecuado de la imagen del sitio. ", pp.153-160を杓谷が分担執筆 )	

1. 著者名 Seiichi Nakamura, Takuro Adachi and Masahiro Ogawa (編著者), Seki Yuji (関雄二), Kazuo Aoyama (青山和夫), Shigeru Kabata (嘉幡茂), Shigeki Shakuya (杓谷茂樹) ほか (共著者)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Institute for the Study of Ancient Civilizations and Cultural Resources, Kanazawa University (金沢大学文化資源学研究センター)	5. 総ページ数 214
3. 書名 Japanese Contributions to the Studies of Mesoamerican Civilizations: The 40th Anniversary of La Entrada Archaeological Project ( "Una perspectiva sobre el problema de la invasion ilegal de los vendedores locales en la Zona Arqueologica de Chichen Itza, Yucatan, Mexico ", pp. 147-155 を杓谷が分担執筆)	

1. 著者名 ラテンアメリカ文化事典編集委員会	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 780
3. 書名 ラテンアメリカ文化事典	

1. 著者名 青山和夫、米延仁志、坂井正人、鈴木紀	4. 発行年 2019年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 468
3. 書名 古代アメリカの比較文明論 メソアメリカとアンデスの過去から現代まで	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------